

どなたでもいつの会でも参加できます

5月の「森三郎の作品を読む会」では、

「竹馬與市」(「赤い鳥」昭和7年4月号初出)

森三郎童話選集「かささぎ物語」所収)

「鼻のはれもの」(「赤い鳥」昭和7年4月号初出) を読みました。

「竹馬與市」は「三河の依網(よさみ)」を舞台にした童話だ。

「おばあさんは、毎日濱へ出て汐をくみ、おぢいさんは家にゐて、おばあさんのくんで来る汐を塩田にまいたり、塩やきがまで煮て塩をこしらへして、かすかなくらしをたてゝゐました。」と「年より夫婦」の暮らしぶりを説明している。刈谷市の「歴史の小径(小垣江)」(刈谷市教育委員会)によれば、「江戸時代、小垣江村で塩がつくられていた。幕末あたりまで塩浜があつたとされる。」ということだ。依佐美地区でも塩浜があつたであろうと想像できる。

「竹馬與市」は、夫婦の「男の子があつたら」という願いで夫婦のところにやってきたいわば「申し子」である。

「身のたけがたつた三寸くらゐ」という「小さ子」であること、山姥にさらわれていくが、そこで山姥の弱点を利用して山姥を退治し、自分は当たり前前の人間のたけになつて無事に家に帰りついたこと、その後、村一番の大金持ちになつて望みどおりの相手と結婚し、おじいさん、おばあさんとともに四人でむつまじく暮らしたということなど、「申し子」譚の要素を揃えた話になつてゐる。

ただ、「與市」が気みぢかな乱暴者で、気に入らないことがあると竹馬で夫婦をなぐりつけるという設定は、現在では受け入れがたい。たとえ、山姥が「與市」をさらつていくきっかけづくりであつたとしても。

「鼻のはれもの」は「三條中納言」「みかん」に続く「万葉集」に題材を求めた童話である。

持統天皇とその女官の「志斐野」の歌のやりとりを柱に、話は広がっている。歌は「万葉集」巻三 雑歌の236と237の歌である

天皇、志斐の姫おみなに賜う御歌一首(岩波書店「日本古典文学大系」)

不聴いなしと言へど強ふる志斐しひの強語しひがたりこのころ聞かずて朕恋われにけり

志斐の姫こえの和へ奉る歌一首 姫が名いまだ詳つぼひらかならず

否いなと言へど語れ語れと詔のらせこそ志斐まをいは奏しひがたりせ強語しひがたりと詔の

ここで気づくことは、「鼻のはれもの」の中では女官のことを「志斐野」と呼んでいるが、大系本「万葉集」の中では、志斐一族の老女で名前ははつきりわからないといつてゐることである。

とは言え、森三郎さんはこの「強い語り」(聞くのをいやがる相手に無理に話を聞かせること)の好きな「志斐野」さんをなかなか愛情深く描いている。そして鼻のはれものがひどくなつて宿下がりをした「志斐野」を案ずる持統天皇の優しさ、さらに懲りずに「もつとお話し、お話し」とお望みになるのは天皇様の方なのに、と曇み掛ける「志斐野」の滑稽さを描いている。その返歌を見て、天皇と一緒に「ほっほ」と笑つてゐるのはおそばにいた女官たちだけでなく、森三郎さん自身でもあつただろう。

なお歌の意味は子どもたちが分かるように文章中で紹介してある。

次回予定 平成25年7月12日(金)午後1時~3時

「桶狭間の戦」(「赤い鳥」昭和7年6月号初出)

「虹の松原」(「赤い鳥」昭和7年6月号初出)

森三郎童話選集「かささぎ物語」所収)